保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——（四）

津守　真

五月二十四日（つづき）

イメージの世界では大きさは問題にならない

私が部屋にはいると、女児Maが人形のうちから私のところに寄ってくる。私も人形のうちのわきにゆくと、「よるです」と言って、私に人形をわたし、自分が人形用の小さなベッドの上に横になり、ふとんをかける。しばらくして、「朝です」と言って起き上がる。こういうことをくりかえしている。

人形のベッドは小さくて狭くて、Maの身体ははみ出してしまうのに、Maはそこに身を横たえ、小さなふとんを自分の上にかける。そうすると夜になる。こういうことは、幼児の人形遊びにはしばしば見られることである。幼児にとっては、人形の大きさも、自分の身体の大きさも、違いはないかのようである。おとなの目に知覚されるものとしては、大きさが違うものでも、子どもにとっては、それは問題になっていない。おとなの眼に映るものと、子どもの遊びの眼に映るものとでは、相当の相異があると考えた方がよい。家庭の子どもの例であるが、私は子どもが可愛がっていた人形のために、木工をしてベッドを作り、ペンキで色を塗ってやったことがあった。それができ上がって、人形をねかしたら、その子どもは、直ちに人形を外に放り出して、自分がベッドの上に横になった。もちろん、子どもの身体は半分以上はみ出してしまったのであるが。そのとき、私には、子どもが人形に嫉妬しているように思えた。子どもにとっては、人形は生きている相手であることを考えると、自分は持っていないベッドを作ってもらった人形に嫉妬することは、理解できることである。

はみ出る子どもを共通の遊びにつなぎとめること

Maはこうしてねたり起きたり、私はごちそうを作ってやったり、おうちごっこをしていた。そこに男児Kがきて、ままごとのうちの椅子に腰かけた。Kは入園以来、子どもの中にとけこめないことが多く、時々乱暴な行動をする子どもなので、私はMaと一緒のおうちごっこをするとよいと思って、Kをお父さんと呼んで、皿やコップを渡したりした。私がたべるまねをすると、Kは次々に茶碗を差し出したり、皿を渡してくれたりする。しかし、投げることもあったり、ごしゃごしゃにしたりして、荒れた感じである。私はKと落ち着いた交りをもちたいと思い、いろいろにごちそうを注文したり、Kの渡す皿を受けとったりするが、Kは「なんだ、こんなの」と言って皿を放り投げたり、足でがしゃがしゃにしたりする。私がMaの方に相手をしていると特にひどい。「おとうさん」と呼んで、何か注文すると、良い顔をして応じろが、それでも、ひっくりかえしたり、ふみつけたりする。Maのおうちごっこの相手をしながら、こうしてKとつき合っていた。その日帰り際に、Kは、私に「あげる」と言って、紫のきれいな花を渡してくれた。そして、小さな声で私にささやく。「きょう、パパ、かぜでねてんの」しばらくして「みせて」と私にくれた花をたしかめる。並んで廊下に出てから、「おじちゃん」と声をかけて、私に手をふる。

Kとおうちごっこのやりとりをしていたその場では、Maが手渡したものをひっくりかえしたり、ふんづけたり、注意したくなるようなことが再三あった。しかしその時に、私がとらえたいと思ったのは、荒れた行動自体ではなくて、そんなに荒れるにもかかわらずその場にとどまりつづけ、しかもまともにおうちごっこのやりとりの中に入りこむことのできないKの心の世界であった。そうしなくてはいられないKとのつながりを切らないで、その相談相手になることであった。混乱した心の状態から脱け出そうとしている幼児の相談相手になるのは、ことばによってではなく、体の動きを通してである。自分の傍につけておいたり、一緒に走ったり、遊んだりすることによってである。そんなことをしてはいけないとか、こうしたら、とか、ことばだけで注意したり、示唆したりすることは、ほんの小さな一言で、自分とは関係のない世界につき放してしまうことになりかねないので、子どもの外に立って使うことばには細心の注意を要すると思う。自分との関係を離れた子どもは、反抗や乱暴な行動を増大させてゆき、おとなとのまともな関係からはずれた、裏側の世界に生きるようにさせ

てしまう。

この日帰り際に、Kが、「きょう、パパ、かぜでねてんの」とささやいてくれたとき、父が病気でねていて、母親がふだんよりいそがしく、子どものことをかまってやれないで数日を過ごしている家庭の様子を思い浮かべた。Kはとかくこの日のような行動が多いのであるが、この日はとくに、満たされぬ生活の背景があったのだろう。Kがこう言って私に教えてくれたのは、Kにとっても重大であった家庭のできごとを知らせてくれたのであろう。そして、紫の小さな花を私に渡してくれたのは、Kとのつながりをつなぎとめることができたことのしるしとして、私にはうれしいことであった。このあと二日後に、私が幼稚園にゆくと、すぐにKが私を見つけて近寄ってきて、「おじちゃん」と親しげによぶ。その日には、何回かおじちゃんと呼んだ。わざわざ窓の外からのぞいてよんだこともある。

他の子どもとの間で、子どもの中にうまくはいりこめなくて、乱暴をしたり、荒れたりする場面は、この後もしばしば見られた。夏休みのあと、秋になってからの類似の場面について次に述べる。

Kと、女児Mi、女児Asが人形芝居の舞台の前に座り、動物の指人形を手にしている。私も一緒に座っていると、だれかが舞台に出て指人形を動かし、せりふを断片的に言う。私も舞台に出て、馬や黒犬の指人形を動かすと、皆がじっと見ている時もあるが、間もなくKは、女の子の指人形をとったり、それを放り投げたりしはじめる。その後、MiとAsが、ままごとのうちで自然にままごとをはじめると、Kもままごとのうちのいすに座る。しかし、Kはテーブルをけとばしたり、他の子が差し出すものを、「いらねえぞ」と言って払いのけたりする。私もそこに座って、Kにごちそうを持っていってもらったり、Kの持っている指人形のりすが病気だからと言って、お見舞にいってもらったり、電話をかけたりすると、Kは「なんだ、こんなの」などと言いながら、そこにとどまっている。人形芝居でも、ままごとでも、Kが荒れないように気を配ってたえずしゃべらなければならず、それが女児の方の想像の世界にも合うようにせねばならないから、その両者の間に立つ者としての精神的緊張は大きい。その時に私のとった具体的行動や言語は、それでよかったのかどうか、もっと違うやり方がいろいろあると思うが、複数の子どもが同じ場所にいるときに、そこにいるおとなとしては、どの子どもも満足するような入り方をしたいと思うので、緊張が生ずるのである。ままごとの後半では、Kも他の子どもたちとのやりとりの中に落ち着き、MiやAsが

Kのところに皿や茶碗など運ぶので、Kもまんざらではないような様子だった。こうして、朝から昼食の時間まで、三人の子どもたちの遊びがつづいた。この後半の時間には、Kが女児の差し出すものをひっくり返したり、拒否したりすることが何度もあったが、そのままにしておいた。そうすると、一時ごたごたしても、共存して遊びがつづく。(十月十九日)

この日帰り際に、女児は、自分の隣の椅子に片足をのせていて、他の子を座らせない。ここはKちゃんの場所だと言っている。午前中、折にふれてKに物をとられたり、ひっくり返されたり、ごたごたしたのに、Kの場所を自分の隣にとっておくというのは、MiとKとの間に通じ合っているものがあったことがわかる。子ども同志の間には、たとえくい違いや葛藤があっても、共通の親しみが底に流れているのを見る。それだけに、第三者としてのおとなのはいり方のむつかしさを思わされる。おとなのはいり方によっては、子どもたちの間に、優劣善悪をつけて、間を切り割くはたらきをしてしまうだろう。一方がはみ出さないように、つなぎの役としておとなが必要とされることは、たえず生じてくることであるが、あるところから先は、子ども同志に任せることが、子どもの間の親しみを育て、互いに納得のいく解決をすすめることになるのであろう。

この日から数日後に、Kは、五、六人の男の子たちと、自動車を押して庭中走りまわって、三十分以上過ごしていた。三歳児の二学期のこの子どもたちの群れは、特定の共通の目的があるわけではなく、ただ、皆と一緒に走りまわることが面白いようである。Kはその中にまじって一緒に走りまわっている。はみ出さないで、みんなの中で成長することができている第一歩をここに見ることができる。

Kはこれで皆の中に交わってゆける能力を獲得したというようなことではない。Kのような子どもは、折にふれて、このままごとに見たように、一緒に参加したい気持ちがあるのに、ひっくり返したりふみつけたり、皆からはずれる行動をとることがしばしばあるだろうと思う。その外にあらわれた行動だけに目をとめて、評価していったら、その評価にかなう表側の人々と、それからはずれる裏側の人々を育てることになってしまう。そうなったら、反抗や反逆の精神を作り上げることになるだろう。小学校の高学年や中学の段階で、このようなことが顕著にあらわれている例は数多くある。その年齢では、幼稚園の時と同じような配慮がおとなの側に必要となってくる。幼稚園の段階は、自分が受けいれられたり、受けいれられなかったりする社会生活の最初であり、そこで他の子どもたちと共通の親しみを経験することは、子

どもの社会生活に対する根本的態度を決定するほど、重要なものではないかと思う。

ここに掲げた例にも見られるように、三歳のころには、子どもたちの仲間からはみ出すことは、しばしば起こりがちである。三歳児にとっては、仲間入りをしたいと思う子どもたちは、年上のことが多く、体力も、言語力も知力もまさっている場合が多い。仲間に加わりたいという気持ちの生まれるときには、概して、こういう優劣関係から出発することが多いとは言えないだろうか。それを自分で乗り切って解決してゆける場合もあるが、おとなの助力によって仲間入りできるようになる場合も多い。次に家庭児について同様の例を引いてみたい。

一緒にいて楽しむ経験の共有

P（四歳）とSk（五歳）とが、おうちごっこをして面白く遊んでいると、Y（三歳）も、同じ赤い椅子を並べて遊び始める。PとSkは遊びなれているので、相互の会話も多い。そのうちに、SkとPは、Yの赤い椅子を机に使い始めたので、Yは泣いてしまう。母親が別の椅子を持ってきて、それを使ったらと言うが、Yはそれではいやだと承知しない。困っているうちに、ダンボールの箱をたまたま見出したので、これにしたらというと、Yは「うん」と言うので、そこにテーブルかけをかけ椅子をおき、ダンボールに窓をあけ、カーテンをかけてやる。Yはその椅子に座り、安定して自分の遊びをはじめる。途中でPの髪をつかみ、「引張っちゃうよ、いたくしちゃうよ」と言ったりするが、皆の中で遊びはじめる。（四月一日）

ここでは、最初は主として遊んでいたのは、四歳と五歳の年上の子どもたちであり、三歳のYは、同じ場所で遊んでいても、ひとりで何かしていることが多い。けれども、自分の赤い椅子を大きい子どもたちにとられると、物をとられたというよりも、大きい子どもたちの仲間からはずされたことに対する悩みと怒りの方が大きいようである。だから、他の椅子を持ってきても満足しない。泣きわめいたり、他の子の髪の毛を引張る。それがひどくなれば、Yは仲間からはみ出したままで終ってしまうだろう。たまたま見つけたダンボールの箱は、テーブルかけをかけたり、また、窓をあけてカーテンをつけたりしたら、Yにも、年上の子どもたちにも共通の遊び道具になった。年少のYは、年上の子どもたちの会話や遊びからは、一歩ずつずれているけれども、新しくできたダンボールの家の中で、自分の遊びを楽しみ、また、他の子どもたちとの会話も次第に多くなってゆく。ここでYは、仲間

から一度はみ出しながら、再び参加する経験をした。そして、だれもが一緒に遊ぶと面白いなという経験をしたといえると思う。何人かの子どもたちが、一緒に遊べるようになるというのは、一緒にいると面白いという経験があるということであろう。だれが良いとか悪いとか言ってごたごたしていたのでは、子ども同志でこの次も一緒に遊ぼうという気持ちをなくさせてしまう。おとなは、とかく、そういう小さなところに目がゆきがちである。一緒に遊んで楽しかったという共通の経験が持てるようにもってゆくことが、おとなとしての目のつけどころと思う。

それから十か月後、大きい子どもたちが数人で戸外で走りまわっていると、最年少のYが、一足おくれて皆の走り去ったあとに、パタパタと追いかけてゆく足音がきこえる。しばらくして、Yは私のところにきて「だっこ、だっこ」とせがみ、機嫌がわるい。私はYと何かして遊ぼうと思い、いろいろ提案するが、何を言ってもきかない。そのうちに大きい子のひとりが通りかかったので、「Yちゃんもいれて」とたのむと、その子はYの手をひいて、皆の遊んでいる方に走っていった。Yは手をひかれて走り去るときに、私に「むこうにいってて」と言って、押しのける。そのあと二時間くらい、Yは大きい子どもたちの中にまじって遊んでいた。(二月十一日)

ここでは、子どもはおとなと遊ぶのでは満足していない。むしろ、おとなは押しのけて、子どもだけの仲間に入りたいと望んでいる。おとなのところにくっついて、抱いてほしがり、いろいろむずかっていても、それは子どもの仲間入りをすることができなかったからであった。しかし、私はもう少しでこの点を見逃すところだった。自分のところにくっついてくる子どもは、もしかしたらその逆のことを欲しているのかもしれないと思い、その前に、一足おくれて皆を追いかけていたことに気がついて、通りかかった大きい子どもに声をかけることによって、Yを大きい子どもたちの仲間にいれることができた。そのあとは、おとなには見えないところで、大きい子どもたちの中で、年の小さい子どもを一緒に加えてゆく試みがいろいろなされていたに違いない。ときどき泣き声やわめき声がきこえながら、二時間も遊びがつづいていた。子どもの仲間入りをするということは、三歳児にとっては、大きな関心事であることがわかる。

子どもの仲間に参加するに至る過程を、幼稚園と家庭の事例について、いくつか見てきた。すでに仲間を作って遊んでいる子どもたちを見るときには、それが当たり前の状態のようにみえるが、一人ひとりについて、そこに至る過程を見ることができるな

らば、おとなか、年長の子どもか、だれかがどこかで中間に立って力をかしているのだと思う。

子どもたちが仲間になって遊ぶのを喜ぶというのは、自分が面白く思うことを、他の子どもも喜ぶという共通の面白さがあるからといえるだろう。その最初は、自分が楽しんで何かをしている傍で、他の子どもも楽しんでその子の遊びをしている場が作られることであろう。何か特定の物や、遊びを共有するとは限らない。楽しんで一緒にいられる存在感の共有が、一番底にあるものといえないだろうか。

私は、この小論では、幼稚園と家庭と知恵遅れの幼児の保育の資料をもとにして述べているので、この点についても、知恵遅れの幼児のことにふれておきたい。

知恵遅れの幼児とふれて気が付くことは、ここに述べてきたような、他の子どもの仲間に加わりたいことから生じるような葛藤場面が比較的少ないことである。したがって、おとなとして、両方の子どもの要求の板ばさみになって緊張する体験も少ないように思う。もちろん、おとなの側から、この子も、あの子も見たいと思うが、それができないことからくる葛藤と緊張はあるが、それは子ども同士の間をとりなす緊張とは異なるように思う。それは、三歳でも、全体的な成長がまだそこまで達していないということもあろうが、他の人と楽しむ存在感の共有の経験が少ない場合が多いことも事実である。子どもの遅れの観点から子どもの行動を評価し始めたら、おとなは子どもとゆっくり遊ぶことを楽しめなくなる。そこでは、友だち同士の仲間の底流にある、おとなとの存在感の共有を経験する機会が得られないことになる。この点は、知恵遅れの幼児の保育の上で、たいせつなことである。

帰る間際に

五月二十四日の幼稚園の一日から書き始めたのであるが、この日帰り際に、皆が集まったとき、Msがいない。園庭にさがしにゆくと、だれも出ていない園庭の滑り台の下で、ひとりで箱に砂利をつめている。私がそばにゆき、もう帰る時間であることを告げると、「みんな、まだいる？」と言って、ゆっくり立ち上がってついてくる。まわりにだれもいなくなったことにも気が付かずに、砂利を箱につめることに熱中していたのは、Msにとって、このことはよほど意味のあることだったのだろう。先生は、その砂利をビニールの袋にいれて、持って帰らせる。この子どもは、一日の最後を、満ち足りた思いで帰ったと思う。帰り際のあわただしい時にも、先生の小さな思いやりと心のゆとりが、これからあとの子どもの一日の生活を左右するのだと思う。　（つづく）